

3 あと一ヶ月早かったら・・・

－片岡清子のライフヒストリー－

聞き書き：資料収集調査員 山本 かほり



2004年10月撮影

片岡清子（かたおか きよこ）の略歴

昭和3(1928)年	愛媛県上浮穴郡柳谷村生まれ（調査当時、74歳）
昭和17(1942)年3月	家族とともに渡満（渡満前は福岡県飯塚市 <small>いいつか</small> に在住）
昭和21(1946)年	中国人と結婚
1953(昭和28)年	母、姉、弟、妹は帰国
1974(昭和49)年	一時帰国（半年間滞在）
1979(昭和54)年9月	永住帰国（夫、長男、次男とともに）
現在	東京都在住

はじめに

「私はね、終戦の時に両親がいたから、苦勞と言っても、そんなに。姉は、もう結婚していたから、大変でしたよ」と言って、満洲での生活を語り始めた。しかし、敗戦直後、「日本はもうなくなっている」という情報に翻弄され、「中国人にお世話になって生きていくしかない」と結婚。その1ヶ月後、帰国のニュースが飛び込んできたという。後悔したが、そのまま中国に残り、1979(昭54)年、永住帰国。清子のことを心配し続けた母親はすでに他界。兄が保証人となって、帰国を果たしたという。

1. 渡満まで

生い立ち

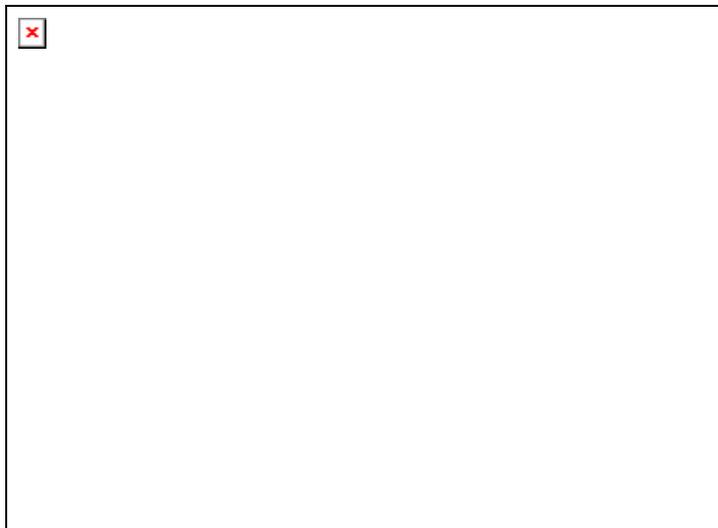
昭和3(1928)年の7月30日、愛媛県の上浮穴郡柳谷村生まれ。しかし、父親が次男だったために、職を求めて転々としたようである。ほとんどを九州で過ごした。

私の父は次男だったので、長男じゃないから何回も引っ越してる。学校に行ったのは、九州のほうに引っ越して、九州の学校に行ったから。愛媛は生まれた所。私は、小学校は福岡県飯塚市(で通った)。昭和15年(に卒業)か。立岩尋常^{たていわ}小学校。

父は愛媛県の、四国の人間です。明治28年生まれです。うちの父は大工もできるけど、身体弱かったんですね。だから、大工の仕事なんかしてるのみたことなく。炭鉱に行ったりとか。九州は炭鉱があるでしょう、だから九州に引っ越して。最後に、飯塚市から満洲に行ったの。

渡満理由

渡満は昭和17(1942)年7月。戦況が悪くなり、食糧難であえぐようになっていた。父親は、当時、小作をしていた。満洲に行けば、食料は困らない、土地はもらえると
いう宣伝にのって、父親が渡満を決心。まだ、幼かった清子は、特別な思いもなく、
両親に
た。
連れられて渡満し



一家の写真

(写真を見せて) この家族みんなで行ったんです。父と母と、3番目の兄(1番目、2番目の兄は、満洲に行く時はもう兵隊に行っていた)、姉に、私と弟2人、妹1人。結構大家族だったんですけど。8人です、行く時は。きょうだいは10人だったんだけど、2人なくなったから。(この写真は) 渡満する前に、記念にっいて。1枚だけ(残って)あったの。それを弟がみんなにこうして焼き増ししてもらって、分けてもらったの。

渡満した理由はですね、うちは飯塚市の郊外で、お父さんは小作をしてたの。そうすると戦争が厳しくなって。すると近くに炭鉱があるでしょ。炭鉱に住んでる人は、お米がないからひもじいんですよね、配給だけで足りなくて。私ももう小学校の5、6年生で、覚えてますけど、赤ちゃんおぶった女の人が「お米を分けてくれ」ってくるわけ。お米作ってるから、うちは食べるのには困らなかつたんですけど、そんな人たちに分けてあげると警察のほうにばれたら、違反になるんですよ。だから、うちの父は、こんな所において、泣いてくる人に分けてあげないのは悪いし、分けると違反になるから（と言って、渡満を決めた）。ちょうど、この2番目の兄の友だちの手芝さんという方が、先に渡満してたの。それで、家族連れに帰ったとき、うちのこの兄、まだこのときは兵隊に行っていなかった（その後、家族の渡満前に兵隊に行った）から、満洲で開拓団で10年経ったら10町歩の土地がもらえるという宣伝で、それに乗って。

うちのお父さんも、子どもが多いし、こんな狭い日本に居て、食糧難であえぐより、満洲にいったほうがいいだろうって言うので、その言葉に乗っていった訳なんですよね。家も売って、全部売って、渡満したわけなんですけど。

（満洲に行くときは）私はまだ子どもだから。小学校出てすぐだから、まだそんなに、親についてくんだから、自分はどんなって、気持ちはなかつたですよね。私なんかよくわからない。兄が（兵役から）帰ってきて、土地もないし、小作だし、だからもう満洲に行った方がいいんじゃないっていうことになって。うちの父も、子どもいるんだし、人の土地を小作で作ってたんでは（先が見えないと思った）。その頃、もう食糧難になってましたから。満洲に行けば食べ物には困らないだろうからって言うので、乗ったわけですよ。いってみたら、満洲は寒いでしょう。こんな所、来るんじゃないかって、もう後悔して。お父さんがもう嫌になって、もうこんなところなら、帰っても、家も何にもないけど、もう内地に帰ろうって言ってる時に敗戦になって、帰れなくなって。

2. 満洲での生活

開拓団で

（満洲へ）行った時には父も母もまだ、（3番目の）兄もいたし姉もいたし（みんなで開拓していた）。弟たちは学校だけど、私は家で留守番みたいに、炊事や家の掃除なんかやって。

開拓ですけど、あの頃は日本の政府のほうで、入植って言いますよね。入植した人には、馬と牛が1頭ずつ配られるんですよ。だから馬を使って畑を耕して。もっとも、行った年には、みんな一緒に行ったでしょ、入植した人。20人ぐらいいたかしら？

(開拓団は)興隆開拓団。これは第9次(集団開拓団)なんですよ、第9次興隆開拓団。(福岡県の)糸島というところの人が先遣隊で行って。そのあとから糸島の人たちの農家の人たちだけでは足りなくて、うちみたいに農業してないうちも、農業しているうちも、満洲へ行ったんです。私たちが、開拓団に行く時は、呉服屋さんもいれば商売していた人たちもいたんですよ。だから、農業なんて全然したことない人もいたの。それで、はじめの年は、5軒ぐらいで組を作って共同作業なのね。その畑がうちから遠いから、みんな組作って。

第9次興隆開拓団

この開拓団は、龍江省訥河県の拉哈駅西方約20kmの甘南県平陽鎮付近に入植した10個の第9次開拓団のうちの一つである。これらの開拓団は、ソ連参戦後も交通その他の事情により、現地での越冬を余儀なくされた。

初めのうちは、周辺の原住民との関係も良かったが、遠方の匪賊が襲来するに及んで、周辺の原住民も匪賊化した。特に、武器接收後は益々横暴なものとなり、各団とも十数回の襲撃を受け、ほとんどの金品を掠奪され人命の犠牲も相当数に上った。そこで、各団とも部落を本部に集結し、防衛体勢を固めた。

昭和20(1945)年11月に光復軍が平陽鎮に進駐してきたことにより、匪賊は一時後退して治安はやや回復したが、昭和21(1946)年2月頃になると光復軍と匪賊が共同して来襲するようになった。3月に入り、八路軍の進駐により匪賊は一掃されるに至った。

同年8月24日に還送命令が出たことにより、平陽鎮に10個団が集結し、寧年、チチハル経由で帰国の途についた。

(満洲開拓史刊行会編集発行「満洲開拓史」(昭41.4.17発行)より要約)

共同作業していた頃は、母が家で留守番してたなあ。私は姉たちと一緒に畑仕事を。長いんですよ、満洲の土地は広いから一畝をあっちまで植えていくのに、もう半日ぐらいかかるの。あっちまでついて、また戻ってきたら、お昼になるくらい。一畝をずっと行って。

農業してない人が行ってるでしょ(だから、農業のことは全くわからない)。今から思うと、トンチンカンなことを言って、みんなで大笑いしていた。

(作っていたのは)とうもろこしとか粟とか、あんなの作って。それ1年ぐらいかなあ、共同作業して。それから新しい家を建てて。本部って行って。中国人ですよ「満人」って私たちは言っていましたけどー中国の人の小さい村があるんですよ、10軒ぐらい1つの村が。それを、開拓団の人が全部中国人を追い出して、そして開拓団の人がそこに入ったわけ。中国人の家に。それから本部って行って、開拓団が家を建てたの。宿舎みたいな。私たちは本部に引っ越して行って、そこから個人経営になったの。自分たちの畑で。今までは共同作業だったけど。2年ぐらいだったかな、共同作業したの。それから初めてだったかな。20年が

終戦だから、本当1年ぐらいしか個人では作ってないですよ。

(生活は)行ったはじめの年なんかは配給制度でしょう？お米は、1ヶ月にいくらって。本部のほうから配給だから、家のお母さんがその頃食事の用意してて、大根なんか切って、それこそ「おしん」でやってる大根飯みたいに、大根切って入れたり、それから、春になったら、野草があるでしょう、食べられる。そんなの摘んできて、湯がいて。

ジャガイモとか大根とかはありましたけどね。お米は配給制度だから、はじめの年はやっぱり。だから、母が家で留守番して、炊事なんかする度に、私たちお弁当持ってってでしょ。だから、出来るだけお米のごはんもたすようにって。自分の分も全部私たちに持たせて、自分は家でジャガイモとか春になったら野草が出来るでしょう、あんなのって来て食べたり。(大変さは日本と) 変わらなかった。終戦前で、もうその頃は、満洲だってやっぱり厳しかったですよ。配給だったから。

厳寒の満洲

(満洲の生活は) 寒いのが一番(大変)でしたね。やっぱり慣れないから、気候に。寒いですよ。零下30度で、家の中、白く氷が張り付いてね。特に、私たち日本人には(気候は厳しかった)。その土地の、中国の人たちはオンドルを上手に作るから、温かい部屋だけど、こっちから来た日本人、日本式の家を建てるから、(床が) 高くて。だから、ペチカ作ったりしたけど、それは煙がいっぱい家の中たちこめて、おまけに、作ったオンドルっていうのは、いぶし方が悪いでしょう、土のこね方も違うし、中国の人とは。だから、ひび割れてこっちからあっちから煙が出てくるんですよ。それで、トープスっていう、こんなレンガみたいのに草を入れて作って敷くわけ、オンドルは。そうすると、つくり方が悪いからおれるでしょう。すると、オンドルの屋根が、こっち高くなった、あっち高くなったって、うちのお父さんが、「満洲には山はないけど、このオンドルには山があるね。」って言って、笑ったのを覚えてます。割れて落ちるから、割れた隙間から、オンドル炊くと煙がでてくるの。

だから、いろいろ嫌になって、こんな寒い所だし、オンドル炊かなければ寒いし、炊けば煙がもくもく出てくるし。中国の人たちはそんなことない。上手に麦わらとか入れて、泥こねて塗ってるから。日本から来た人は慣れないから。

清子の仕事

(農業の仕事は) 私は手が悪いから、農業はあんまり(しなかった)。(生まれたところは) 山なんですよ、四国の。囲炉裏っていうのがあったでしょう、昔は。この兄に(私を) 世話させて、家の母は裏の畑で洗濯してたらしいの。そうすると、夏だから、うちの兄も遊び盛

りだから、私をほっぽり出して遊びに行ったらいいんですよ。すると、私はちょうど（1歳の）誕生日頃で、ハイハイして、その囲炉裏に手を入れて泣いてたんだって。その頃、まだ医学が進んでないでしょう。だから、お母さんが慌てて、なんか変な泣き声がすると思っていったら、手を突っ込んで泣いてるから。その時に、お医者さんが、今みたいに別々に包帯すれば、こんな後遺症残らなかったんだけど。まだ、（1歳の）誕生ぐらいの子どもに、そのまま包帯したらいいんですよ。だから、あとで、母が見たら、指がくっついてるからって言って、そのお医者さんのところに行ったら、「ああ、大丈夫。大きくなって保険に入って、お医者にかかれば治るから。」って言われたって。その頃の親も、今と違って言われたとおり、「はい、そうですか。」って言って帰って来たっていう。

（その後遺症で指が）伸びないの。だから、私は手が悪いっていうので、やっぱり父母も不憫だった。カタワにしたっていう心があるでしょう。だから、私は、個人になってからは母が（仕事に）出て、私は留守番で。あんまり畑仕事なんかはしてないんですよ。

満洲の風景

（中国人とのつき合いは）開拓団のところはないの、ぜんぜん別だから。中国の人たちは中国の人。部落が別にあって。開拓団は開拓団で長屋を広く長く作って、日本人は日本人で。まあ、付き合う人もいないことはなかっただろうけど、私の記憶では、中国の人とは付き合いはしてなかった。

朝鮮の人はいなかった、甘南県っていうところは。（だからつき合いのある人は）開拓団の人たちばかり。

（満洲の思い出は他に）春になると野山いっぱい山百合とか、今日本ではニッコウキスゲっていうでしょ、あれが野原一面に咲くんですよ、開墾してない土地は。きれいですよ。長野にいてニッコウキスゲがあるからって見たけど、こんなに低い。あそこなんか、人の背丈ぐらいあって、大きな花がいっぱい。それを中国の子どもが籠もってつぼみをとりに来るのね。私たちは、うろ覚えの（中国語で）、「メシメシ」ってそんな言葉しか覚えてないのね。

「メシメシ」っていうのはご飯食べた後に言う。知ったかぶりして、中国の子どもに話しかけたりして。「リュタリュタ」っていうのは「散歩ですか？」っていう意味なのね。その言葉はうろ覚えで、初めてだから珍しくて（しゃべりかけたりした）。

（ニッコウキスゲの）つぼみを取って、蒸して乾燥させてね。今、売ってるでしょ、中華料理の材料で。黄色い花が一面に咲くんですよ。それに、紫の花とかヤマユリの花、小さいヒ

メユリの花とかね。だから、農耕にあって、帰りに私は花好きだから、いっぱい野の花を積んで帰ってくるの。そんな時は良かったですよ、春は。帰り、道の両側にいっぱい花が咲いてるの。あの時は良かったですね。

姉の結婚

清子は、農業には携わらなかったが、家の手伝いをして日々を過ごしていたという。そんな頃、姉に結婚の話がもちあがる。

私の姉は結婚の話があったんですよね。うちのお父さんは反対したんですけど、「使うためにやっと大きくしたんだから、まだ嫁になんかはやれない」っていったけど、やっぱり団長の命令には逆らえなくて。姉の夫は、私たちと一緒に開拓団に参加した。その人の家族は先に満洲の開拓団にいったんですよね。それで、その人は、兵隊に行ってたけど、傷痕軍人になって、足怪我して、それで私たちと一緒に開拓団に行ったわけなの。それで、独身でしょ、独身だとやっぱり団長さん、うちの姉を世話して、結婚したのね。

おとつい、姉に電話して、「聞き取り調査があるんだよ、終戦の頃のこと色々。でも私は親がかりだったから、そんなに苦労してないからね」って姉に言ったら、「私なんか話すこといっぱいあるよ！苦労あれだけしたんだから」って姉はいうんですよね。結婚して子どもがいたし、敗戦の頃は。姉は苦労してるけど、私と苦労が違う。

3. 敗戦を迎えて

ソ連軍に追われて

(私は敗戦の時には) 親がいたでしょう、兄は兵隊に行ったけど、姉も嫁入りしたから行った年の次の年かな？ (だから) うちじゃ、私が一番上になったわけね。弟と4人しか残らなかったから。その兄は、敗戦の年かなあ？ 北安ほくあん (清子は中国語の音で「ペイアン」と発音。以下同じ。) っていうところに、軍隊に入営して。

うちの兄たちは21歳かなあ、徴兵検査を受けるでしょう、それで、甲種合格とか乙種合格とかあるでしょう。それで、身体に何にも病気の無い人は甲種合格。だから、うちのお父さんが言ったのね、「みんな健康で育て甲種合格だから嬉しいけど、やっぱり悲しい」って。「せっかく子ども大きくして、今から役に立つっていうときになったら、兵隊にとられてしまっ」親にとってみれば、お国のためって言うけど、親にしてみれば辛かったらしいね。もうこの2人も、甲種合格で兵隊にとられたでしょう、そしたら3番目の兄もいったわけ。(姉も結婚したから) 私が一番上になったわけ、敗戦の頃は。

私たちは、8月15日に日本が負けたっていうことを知らなくて。そのうちに、開拓団は銃を

1軒に1つずつ配給して配ってたけど、ソ連の兵隊が来て、それをもって行って。それと、馬をもらってたですよ、1軒に1頭ずつ。その馬も全部ソ連が引っ張っていったの。それに、うちのもらった馬っていうのが、軍馬っていう、軍隊にも馬がいたんですよ、あの頃。子ども産む馬が軍隊にいたら戦争の役にたつでしょう、子ども産むときに。だから、開拓団で交換したの。開拓団の牡馬を軍隊にやって、それで、牝馬を開拓団に連れてきて。そうすると、家のお父さんが交換してきた馬っていうのが立派な馬でね。真っ黒な毛で、お尻なんか溝が出来るくらいおっきなお尻して。この馬が牡馬産んだら種馬にするって。馬の種類も良かったんですよ。だから、お父さん喜んでね。すると翌年、本当に牡馬産んだの。それがだっこでね、私たちが家で留守番してると、このくらいになって飛び回るようになったら、カーって私に嘔みかかってくるの。その馬も知らないうちにソ連のほうに引っ張っていかれたんですよ。

(それは1945年の)9月頃でしょうね。すぐに銃も取り上げられたし、馬も家も全部(取り上げられた)。もう負けたからって、上のほうから開拓団の団長なんかには通知があった。うちの団長が偉かったのがね、敗戦になると、私たちが住んでいた本部、そこに壕を築いたんですよ。1つの部落を。私たち、残ってた女・子ども、兵隊に行かなかった男の人、やっぱり、1小隊、2小隊、3小隊っていうように、小隊を組んでね。男と女を混ぜ合わせて、それからスコップで壕掘りしたの。まずそれが、敗戦の一番初めの、鉄砲とか馬とか全部取り上げられて…

匪賊が攻めてこないようにっていうので、壕を築いたの。上に積み上げて。外からだ登れないでしょう？でもやっぱり、近所の中国の人が這い上がってきてね。あとから着る物なんか、大方とられてましたけど。

怖かったですよ。夜なんか鉄砲がないから、槍を作ってね、それをもって1人ずつ四隅に立つの。それで、私たちは交代で品物盗りに来ないように、夜みて回って。中国人たちがくるでしょう？

(中国人は)それまで抑えられてたから、その腹いせもあるでしょう。やっぱり、品物もほしいし。あの頃の中国の人も貧乏だったからね。地主っていえばお金もあるけど、やっぱり普通の百姓は着る物なんか(手に入れるのは)困難だったから。盗りくるから、それを防ぐ為に、私たち、見張りで、夜立ちましたよ。

(女性であっても)そりゃ、たたなきや、残ってるのが。兄なんか兵隊にとられてるから。

(ソ連軍も)きますよ。うちの団長さんが偉かったのが、物見やぐらみたいなのを高く家の上に建てて、上で見張りを1人おいとくわけ。敗戦の年に、初めて水田作ったわけ。勤労奉

仕って、中国人やら朝鮮人の若い青年ね。それこそ川掘って水を引いて、嫩江^{のんこう}（清子は「ノンジャン」と発音）っていう川からかなあ、水を引いて、水田を作るように、大工事をしたの。それが完成して初めて、お米作った年なんですよ。敗戦は8月15日だから、稲は実る前でしょう？だから、秋に私たちは、壕を掘って築いてから、真ん中に大きな門をおいてるわけ。それで、見張りの人も上に1人いて、私たちは、鎌持って縄をもって、稲刈りに行くわけ。食糧確保しなきゃなんないから。それで、稲刈り行ってるでしょう？それで上で見張りが八路軍とか騎馬隊とかいうのがきたら、ソ連の人は馬に乗ってくるわけ。それ遠くからみえるでしょ？それで、バケツなんかたたいて合図するわけ。そうすると、私たちは刈った稲を慌てて背負って、走って帰ってくるの。それで、みんな帰ってきたら門は閉めて、団長が対応に出るわけね。団長さんが偉かった。山本団長っていうんだけど。それで、交渉してもだめな時は、戸をあけて、中に入れるの。それで、みんなそれぞれ家にいるでしょう？私たち娘は、真ん中に座らせて、周りには年寄りや男の人たちを座らせて、家に残らないわけ。家に残ってたら、ソ連なんか引っ張り出して、強姦するでしょ。強姦された人が、逃げ遅れて2人か3人ぐらいいますよ。私たちは、娘だから真ん中に座らせて、そしたら引っ張れないでしょ。そんなにして守ってもらったから。（命の危険も）感じましたよ。銃も何にもないんだから。自分のことは、残った女・子どもとで身を守らなきゃいけないから。

逃避行

逃避行はその年の冬。その開拓団に散らばってた人が、みんな本部に集まったわけ。散らばってたたら、だめでしょう。だから、いくつも満人の明け渡した家に住んでた。うちの姉なんかは部落がそれぞれ違っていたけれど、うちに帰ってきた。共同で住むようになって。それと、姉のだんなの妹さんも、だんなを兵隊にとられたから、子ども3人連れてうちにみんな来たから、もう狭い家にぎっしり。それで、あっちのほうは明渡して他の人が住むようになったから。一冬共同作業で草刈にでたり、稲があるうちは稲刈りして。食料は団長が偉いから、なんとかしたわけ。それから、春になって、このままここにいたんでは（ダメだと言うことになり）、団長が、「南下しよう、日本に帰ろう」と言って。全部開拓団の人まとめて南下するようになったんですよ。そのときに、うちはどうして行かなかったかっていうと、お父さんが病気で、寝てばっかいたから。「一緒についていられないから、行くんだったら、途中で死んだら投げ捨ててっていいから」ってお父さんがいうんだけど。

私はその頃、弱かったんですよ。ここに傷跡があるでしょう？これも敗戦の冬なんですよ。なんか、ばい菌が入ったんでしょうね。ここ、こんなに腫れて、重湯しか食べられなくなって、お母さんに重湯作ってもらって食べさせてもらって。「おまえは弱いし、お父さんは寝たきりだし、どうする」ってお母さんが。それで、開拓団が南下する時に、うちの家族は残ったわけ。平陽鎮っていうところがあったんですよ。開拓団から8里か10里かあったかなあ。鎮というのは、ちょっと小さな町みたいになってるやつ。雑貨なんか売るのがあったの。だから、買い物なんかは開拓団の頃に行ってたのね。そこに会社があったのね。油を搾ると

ころとお酒を作る会社。そこに人を雇うでしょう、人手が足りないから。そこに何軒か病人がいる家族5、6軒かなあ、残った人がそこに行ったの。

結婚

平陽鎮の会社で働いてる人と、その人の旦那さんが兵隊に行ったんですよ。兵隊に行って、男の子が1人いたんだけど、その人が結婚することになったの。それで、日本の人まだ帰国してないから残ってたのね、あちこちに。だから、自分ひとりで行っちゃ、敗戦して次の年でしょ。結婚するのあれ（心細い）だから、私を誘ったわけ。それで、うちのお父さんもお母さんも、その頃まだ帰国のニュースは入らないし、それにデマが飛んだんですよ。日本は原子爆弾落とされて、日本の国が存在しないって。それで、男と女は別々の所へ連れて行かれるって。そんなデマが飛んだのね。だから、結婚の話をその人が持ってきた時は、うちのお父さんとお母さん、「こうなったら、日本の国もあるかないか分からないだし、中国人を頼って生きていくより仕方ないから」っていうので、結婚承諾したわけ。それで、私と井上さんという人と、2組結婚式挙げたわけね、その会社で。運命の分かれ目って、そこなの。1ヶ月したらニュースが入ってきたの、帰国のニュースが。うちの父と母は後悔したけど、もう結婚して1ヶ月。これが1ヶ月早ければ、おまえを中国人なんかにやらなかったって。

結婚は6月の末だった。で、帰国のニュースが7月の末。そうこうしてるうちに、この兄もソ連から（日本へ）帰って、日本から手紙が来たわけ。来たのは、（敗戦から）2、3年たってからかな。まだ私、子どもいなかったから、結婚して1年してからかなあ？兄から日本で生活してるからっていうので。その時はもうお父さんもういなかった。私の父は、私が結婚してすぐに亡くなった、病気で。今でいう、ガンだったんでしょう。あの頃は、お医者さんもないし。それで、うちの主人が棺おけ（を）買ってね、土葬したんですけど。

（夫は日本語）出来ないんですよ。だから、結婚したばかりの頃は、（2人間の会話は）ちんぷんかんぷんで、あっち話しかけても分からない…

（結婚する前は、夫の）顔は知ってた。同じところで働いてるから。その人は機械のほうの仕事してたから。

顔はみてたけど、話したこともないし。うちの主人の写真・・・この写真が（母たちが）帰国する時。これがうちの姉の旦那で、子どもが2人できて。これが、この弟なんですよ。私のすぐ下、2歳違いの弟なんですよ。これが妹。今残ってるのが、私とこの姉と、この弟と妹。きょうだい5人残ってる。この兄は私が帰国してから亡くなっちゃった。これが私の長女。

（結婚をすすめたのは）会社じゃなくて、井上さんという方なんですよ。その人は中国の山西

省の人なの。だから、井上さんって方が結婚するのも、山西省のだんなさん。でも、その人のだんなさん、事務の方。うちの人は機械の方で。事務のほうでお金なんかいっぱいためてたらしいけど、うちの人なんて何にもない、借り着で結婚したの。中国式のチャイナドレスも借りてきて結婚したんですよ。

もう、しょうがない。中国人に頼っていくしかないっていうので。だから、うちのお父さんが亡くなったとき、この人（夫）が棺おけなんか買ってね。

（日本が存在しているという）そのニュースがもう1ヶ月早く入れば、私は中国の人と結婚しなかった。日本の国は健在だっていうニュースがあれば。そのうち帰れるっていうニュースでしょう。

家族の帰国

1953（昭和28）年、母、姉、弟たちは日本へ帰国することになる。母は清子も一緒に連れて帰りたいかったようであるが、清子の2人の子どもをのこることを考えると、中国に残った方がいいと考えたようだ。子どもたちは日本語もできないし、子どもの将来を考えてのことである。清子自身も、中国人の夫と結婚し、子どももできたという現実の中で、日本への帰国は無理だと考え、残留することを選んだ。

私が結婚したのが昭和21年でしょ。それで、28年、最後の引き揚げで、うちの母と姉、弟たちみんな帰国したわけ。その時も、うちの母、悩んだんですよ。私を連れて帰りたいってね。この時、私には、長女がいたの。それで、その下にも1人男の子がいたわけ。その子、亡くなったけど、その男の子が8ヶ月だったねえ。帰国の手続きするようになって、お母さん、「おまえがどっちに決心するか、私たちと一緒に帰るか、中国に残るか話したいから、1回、家にくるように」という連絡がきたの。それで、私子ども2人連れて行ったんですよ。行って1ヶ月ぐらいいたかなあ、母の家に。それで、お母さんも子どもたちを見たわけ。長女、まだ5歳ぐらいでしょ？下は8ヶ月ぐらいの男の子で、これでは親子離れ離れになるわけにはいかないから、やっぱり一緒に帰るのは無理だろうって。母も、無理に一緒に帰ろうと勧めはしなかったの。

主人は、自分がしたいようにっていうような態度だったんですけど。でも、中国人の子ども連れて帰って、日本でどうします？ 帰るなら、置いて帰るしかない。

ここから引き上げる時に、私が住んでたチチハルっていう町で、1ヶ月ぐらい、日本からの迎いの船が来るのを待ったわけ。（結婚した時に、夫が働いていた会社は）平陽鎮だったけど、うちの主人そこやめて、チチハルのほうに引っ越してたから。だから、お母さんたちは手続きするから、おまえがどんなふうに撤収するか、話を聞きたいから、1回来るようになってい

うので行ったけど。私も、もう中国人と一緒にになって、結婚してて、今さら、日本に帰ってきて、子どももいるし、馬鹿にされるでしょう？中国人と一緒にになってたなんて。隠すわけにはいかないんだし。夫も優しい人だったし、だから、あとに残ったんですよ。

それに、一緒に結婚したっていう、井上さん。その人もチチハルにいたの。その人は4人だよ、子どもが。その人も残ってたの。だから、井上さんも残るし、友だちがいるからいいやと思ったっていうので残ったんだけどね。

日本に帰ることは、考えられなかった。やっぱり子どもがいたからね。母にしてみれば相当悩んだんです。

4. 残留後の生活

夫のこと、子どものこと

夫は、優しい人だったと清子は語る。定職がなく、生活が大変だった時期もあるが、夫の家族とは離れて暮らしていたために、家族関係をめぐっての苦労は少なかったようである。しかし、母親が日本人であるために、子どもたちが「小鬼子^{シヤオグイズ}」といじめられたことが辛かったと語る。そして自分が残留したことが正しかったのかどうか、悶々としていた時期もある。

(夫は) チチハルでは、別に定職なくてね。あの頃も仕事は日雇い労働みたいにして。大変だった、生活は。あの頃はまだ中華人民共和国が成立してないでしょ。北安っていう、ここに、うちの3番目の兄は入営して、兵隊でここにいたわけ。

龍江県、龍江省っていったのかな。(地図を指して) チチハルはここ。嫩江ていう、大きな川があったのね。川を越えなきゃ、ここにはこれない。開拓団から、10里か8里ぐらいだったね。あの頃は、馬車。マーチョに乗って(移動した)。

ここに住んでて、黒龍江とね、何町かが一緒になったわけ。それで、後から合併したから、私たちはハルピンていうところに引っ越したわけ。帰国前まではハルピンに住んでいたの。

私は子育て(に専念していた)。中国語も2、3年したら、喋れるようになって。この母が帰るときにも、みんな日本に帰れるって、喜んで歌ったりしていたみたいだけど、でも、うちの母だけ、汽車に乗って泣いてたって。私を置いて帰るから。そんな手紙が姉から来て。その手紙見たら辛くなって・・・私は中国に残ってるでしょう。文通はできるようになったから。

(チチハルでは周囲の人も、自分が日本人だと) わかってるけど、別にその頃は(特に苦労

もなかった)。日本人だってわかって、あれ（苦勞）したのは、文化大革命からなの。それまでは、うちの主人は中国の人だしね。別にいじめられるってこともなかったの。

うちの主人は山西省っていうかね、あっちのほうの人だから、家族いなかったの。お母さんと妹は、あっちのほうにいたから。だから、一人者みたいで、私は親戚関係では苦勞はしなかったんですよね。結婚してからは、あの人の親戚と付き合う事もなかったし。お友だちからみんな話し聞いてみると、姑がいたりね、色々あるらしいけど。私はその点は、言ってみれば敗戦の頃は両親がいたし、結婚してから父は亡くなったけど（苦勞は少なかった）。まあ、人に比べたらね（苦勞は少ない）。姉なんか、そんな話なんか、私はいっぱい苦勞したのがあるよっていうの。

（夫は）優しい人だったですよ。（子どもも、母親が日本人だと）知ってる。でも、私、日本語なんか教えないで、中国語ばかりで話してたでしょう。だから、文化大革命の時に、「ああ、日本語教えずで良かった」ってつくづく思いましたよ。子どもたちが小さい頃、うちの主人は、設計員っていう、地質調べるような仕事をやっていたんですよね。だから、出張が多いの。家にいないでしょう。すると、子どもたち小さい頃、外で遊んでたら、子どもが「小鬼子」っていわれるでしょ、私が日本人だから。子どもたちは、小さい頃それをいわれると、泣いて帰ってくるんですよ。だから、それが私も辛くてどれだけ泣いたかわからない。主人はいないし、私も気が弱いほうなのね。そんな辛いことがあると、親を思い出すの。お母さんまだ元気だったでしょう。だから、親・きょうだい思い出して、「何で私、あとに残ったんだろう、子どもたちは、私の選んだ道は間違ってたんじゃないかな」と思ってね。子どもたちにこんな辛い目に遭わせるんだったら、やっぱり親と一緒に帰ったほうが、本当だったかなあって。選ぶ道を間違えた。子どもたちにまでこんな苦勞させるのかと思うと、やっぱり辛くてね。そんなときは、親・きょうだいを思い出すでしょう、だから、私は戸を閉めて、ワンワン泣くんですよね。そうすると、4人の子どもがじっと私を見てるの。子どもたちは泣かないで。大きくなってからは、負けなかったけどね。まだ小学生の頃は、だれだれが「小鬼子」って言ったって言って、帰ってきて泣くんですよね。一緒に遊ぶときは遊ぶけど、けんかしたときは、あっちは悔しいから「小鬼子」って言うでしょ。小さい頃は泣いて帰ってくるから、私も辛くて。そんなときは親・きょうだい思い出して、「何で私がこんな目に遭うんだろう」と思って。

（夫も、子どもが辛い目にあっているのは）知ってたけど、知っててもけんかのその場にいるわけじゃないし、あとから聞いてもどうしようもないでしょう。

それはハルピン（での出来事）。もう長女はあっち（平陽鎮）のほうで生まれたけど、長男はチチハルでできて、次男と次女はハルピンで生まれたの。

(夫は) 設計院に入ったから、2つの省が合併した時に、ハルピンのほうに来たわけ。その頃は。でも給料は少ないからね。苦労しましたよ。

文化大革命

(文化大革命は) うちの下の息子が1958年生まれだから、58か59年頃かな、あの子が生まれた後だから。あの頃、中国じゃ食糧難で。私なんかやせてしまってね。ソ連が、確か、借金の返済を中国に請求したらしいのね。これは本当ひどかったですよ。特に都会なんか食べるものないでしょう、配給制度で、トウモロコシやコウリャンとかね。決まってるの、1ヶ月に1人どのくらいって。それ、足りないから、育ち盛りの子どもたちに。冬になると、「お母さんおなかすいた。まだご飯作らないの？」っていうの。家の長女は5年生になってたから、コウリャンのおかゆ作るでしょ、そして、上の薄いところを自分についでね。そして、下の、ご飯の粒があるところは弟たちに妹たちについて食べさせて。それが、食料が足りるようになって、その習慣が残っててね。上から薄いおもゆのところばかりつぐから、「もういいんだよ」って私言ったの。冬になると「おなかすいた、すいた」っていうでしょう。食べるものないから、秋に白菜ね、外の固いところ、ぶらさげて乾燥させてるの。それを湯がいて、それでトウモロコシの粉に小さく刻んで交ぜて、作るわけ。それなんかおなかいっぱいにならないでしょう。あの時は、私なんかやせてしまって、自分がかawaiiそうになったの。3年ぐらいかなあ、食糧難が続いて。

(食料は) 売ってもいないの。助かったのは、うちの主人が外で仕事してるでしょう、田舎のほうでは何とかなるから、お米買う切符があるの。配給制度の。あれをもって帰って、私たちにくれたから。言ってみれば、あれで大分助かったけど、本当子どもたちは、おなかすいたおなかすいたっていつて。それで、冬になると「ちょっと待って。お醤油買いにいつてくるから」って、私が言ったのね。帰ってみたら、子どもたちは私が白菜、湯がいてるのを見てるでしょう。上の子はもう学校、行ってたから、下の3人が食器を水につけておいてるの、みんなとって食べてるの。それ、味も何にもないのに。それだけおなかすいてるの。白菜まだ作らないのに、何にもないのを、水から引っ張りあげて食べてるんだから、可哀相だね。文化大革命の時、食糧に苦労してました。

それでも、中国政府もいいところあるの。私は日本人でしょう。だから、特別に配給っていつて、中国の人はもらえないお米を、1ヶ月にいくらかずつ、特別に配給してくれたの。それに、野菜も一律に半斤。半斤っていつたら、250グラムかな、野菜を。それで、指定されてる所に買いに行くの。毎日、行くの遠いから、ためて。うちの長男が買いにいつてた。ためといて10日ぐらいたって。そんなのは、助かりましたよ。

(文革の時に、怖い思いは) ないことはないですよ。鉄砲なんか打ち合いしてるでしょう、

2班に分かれて。私は、その頃仕事に就いて。仕事っていても、主人の勤めてる設計院の、家族の工場っていうのができて、それに、行かないわけには行かない（から行っていたにすぎない）。もう子どもたちも大きくなったし、それに参加したわけ。それは、自分たちが働いて、自給自足っていいですか。（工場に）お金ができれば給料もらえるし、お金が入らなかつたら、給料もらえないっていうような（制度だった）。

（文革では）うちの人なんかどっかに入ってたな。参加しなきゃだめなのね、中立はだめなのね。だから、この大きな運動の時に、現地の人は中立っていうことはできないからって、何とかっていうのに入ったんですよね。それで、子どもたちが心配して、「お父さん、早く会から抜けて帰ってこないよ、殺されるよ」って。怖かったですよ、あの頃。それと、私は日本と手紙がたまに来てたでしょう、お母さんいたから。それで、手紙や写真送ってきたら、仲のいい友だちに、隠して見せるのね。こんな写真、日本から送ってきたよって。見せた後、怖くなるの。こんなを見せて、資本主義を宣伝してるとかいついわれたらどうしようかって。言葉でも、後から「あんなこと言ってよかったかな、もし公安にばれたらどうしよう」なんてね。そりゃ、怖い目に遭いましたよ。

（日本からの手紙は）届かないのもあった。母の手紙は、昨日、私、読んでたんだけど、「お母さん送った手紙、つかなかったそうだね」とか書いてあったから。

ハルピンに（日本人は）いましたよ。日本人いたけど、私はチチハルから、あとから引っ越してきたでしょ。だから、みんなそれぞれお友だちいたのよ、私は住んでるとこの近くに、三田さんて方がいたし、今でも付き合ってるけど。その人が、私は恩人だって言うんですけど、今度、東京に行ったのも、その人が手伝ってくれて東京に住むようになったの。

中国人との付き合い

（その当時は）中国の人とは付き合っていましたよ。隣近所で。みんな良くしてくれました、中国の人たち。やっぱり、性格、私こんなふうで、そんなにあれしないから。今だって、帰ったらみんな、会いに来てくれますよ。隣近所との付き合いは良かった。

労働

工場に勤めてたでしょ。その時なんか、今考えてみたら、リアカー引っ張るのね。だから、子どもたちは、お母さんあっちで苦勞してきたんだから、こっちにきたら、できるだけ楽しませようって言うてくれるんですよね。本当、リアカー引っ張って、朝出るんですよ。2人で1組になってね。それが、何積んでると思います？釘を入れる箱を、ハルピンの西から東まで持って行くわけ。リアカーで、朝出発して、お弁当もって。遠いのよ。ハルピン、相当大

きい都市でしょ。私たち、住んでるのが、西の端なの。それをずーっと真ん中の大通りを、リアカー引っ張って行くわけ。それが、山のように木の箱を積んでるの。空の箱だけど。山のように積んで、2人で引っ張って。今考えても、怖いねって言うの。どうしてかって、坂道があるんですよ。冬は雪が降ってるでしょ。坂道のあるところをリアカーの上を、パーっと上にあげてね。それで、後ろ低くして、走るわけ。それがもし足が滑ったら、車の下敷きになったじゃないですか。その時には覚悟決めて、走ってるけど、一生懸命やってるけど、後から考えたら、よく滑らなかったね。滑ったら、車の下敷きになってしまうんですよ。

そんな仕事もして、それから、その仕事が終わったら、今度は何の仕事だと思います？その工場。中国だからあんなことできるんですよ。飛行機の胴体、金属の、廃材になったのを買い受けてきてね。それで、仕事がないからって、大きな鉄の釜を据えてね。下から石炭燃やして、それを釜ん中に入れて、分離するわけ。中にごみなんかあるでしょ、それから、何かを入れて、分離したのをまた型にはめるわけ。流し込んでね。それで、私は石炭燃やしが上手だって言われて、夜しかその仕事できないの。どうしてって、隣が小学校なのよ。すると、あれを入れるから、黒い煙がもうもうと立つわけ。

うちの娘なんか、私がお弁当もって帰ってきたら、洗ってくれるでしょ、二女が。「お母さん、お母さんの弁当臭いよ。煙のにおいで」って。弁当まで臭みがついてるの。あんなの良く食べたなって。だから、子どもたちは私が苦労したの見てるから、「お母さんをなるだけ楽させてあげたい」って、言ってくれるんですよ。夜なんか、石炭もうもうと部屋中立ち込めてるの。それで、スコップで投げ込んでいて、出るわけ。月が煌煌と照ってるのを見たら、日本の内地で見るお月様と同じお月様だね、と思うと、ひとりでに涙が出て。親を思い、きょうだいを思い。

子どもたちの苦労：日本人の母親をもって

(子どもは) 学校行ってた。うちの子どもたちは、中学校まで、全員。

(文革の頃は) うちの長女がね、苦労したんですよ。中学卒業したでしょ、そしたら、人民公社って、日本でいえば区役所みたいな、そんなところに事務労働って行って、仕事ないからそこに行って、何かあったら、手伝いに行くわけ。無償で。毎日そこに行ったら、各会社から、工場とかで、人を募集するわけ。その時、うちの娘は応募しても、日本人が親だからって、とってこないわけ。それに、うちの長女は相当苦労しました。他の人みんな、一緒に卒業した同級生はみんな、それぞれの工場とか会社に分配されていくでしょう。うちの長女は、親が日本と文通してるからっていうので、採用してくれなくて。あれに長女、相当苦労しましたよ。だから、いい会社には入れない。1回なんか、^{シャーン}郷って行って、村に青年を送り出したでしょ。あの時なんか、私も気が弱いし、うちのお父さんいないし、こっちは弱いからね。宣伝隊っていうのが来るわけ。それで、農村に行け行けって。下放って言うん

ですか、こっちじゃ。あれに行けって。私と娘と、仕方ないね、行かなきゃなんないんだねって。行ったら戸籍移すから、もう帰ってくるの難しいでしょう、そんなのもあるの。ハルピンの市内の工場とか会社には入れないで、仕方ないね、やっぱり行かなきゃなんないんだねって。2人で、用意してたの。

その時、今の婿と付き合ってたわけ。その公社で知り合って。その婿も仕事ないから。あっち(婿)のお母さん強い。「大丈夫、行かなくてもいいから。戸籍怖いんだったら、うちに移しなさい」って言ってね。「うちは何にも怖くないから、戸籍持ってきて、うちに入れなさい。」っていうので、うちの娘も戸籍、あっちに移して、結婚しないけど、戸籍だけあっちに移したら、宣伝隊は来なくなったの。それで、農村に行かないですんだわけ。

(宣伝隊も) 厳しいのよ。もう毎日でも来るんだもの。だんだんだんだん叩きながらくるんだもの。(農村へ) 行きなさいって。仕事ないのに、ここにいてどうするって。行け行けって。結局、その人と(娘は)結婚したの。結婚して、農村には行かないでね。あっちのお母さんは賢いからね。(当時、娘は) 20歳ぐらいだった。

66年なのかな、文化大革命が終わったのは。そしたら、71年頃かな、結婚したのは。数えて21(歳)頃かな、私が昭和50年に日本にいたから。

5. 日中国交回復後の生活

国交回復

苦労はしていたが、1972(昭和47)年に日中国交回復。中国で、望郷の念を持ちながら、苦労に苦労を重ねていた清子にとっては、うれしいニュースだった。

国交回復はうれしかったですよ。でも、残念なことに、(母が)あの年の3月に亡くなったの。3月29日が、私の母の命日だから。9月27日でしょう、国交回復したの。あの年なの。だから、一番待ってくれた母に会えなかったの。

(文通は)できてたけど、私も筆不精でね。文化大革命のころはやっぱり、あんまり書かなかったの。怖いのもあったし。だから、悪いことしたなあと思って。その頃、母は、半身不随になってたから。姉が言うの。姉が見舞いに行くと、まず泣くの。「今ごろ、清子はどうしてるだろう」って。それが親心、母心って言うんですよね。私のことを思いだして、今ごろどうしてるだろうって言って、まず泣くんだって。姉が、私にこぼすのね。せっかく行っても、まず、清子どうしてるだろうって、泣くんだって。

(手紙のやりとりは)1年に2回か3回ぐらいね。私の母から来たら、すぐ返事出せば(よかったけど)。だけど、やっぱり子ども小さかったし、それに文化大革命の頃は、やっぱり怖

いのもあったから。「おまえのお母さんは、日本と、外国と文通してるじゃないか」とかいわれてね。長女は、本当苦労しました。下の3人はそんなことなかったけど、やっぱり長女は今でも私に言うの。「私が一番苦労したよ」って。

日本への一時帰国

国交回復後、清子は、半年間、日本への一時帰国をする。

(里帰りの経緯は) やっぱりハルピンにいたら、通知が来たんです。こんなあれ(事業)があるから、帰ってない人は政府のほうから往復の旅費を出してくれるっていうので帰ってきたの。その時は(日本の家族は) 四国(にいた)。兄も姉も弟も妹も、愛媛県の新居浜市っていうところにいるから、そこに帰ってきて、6ヶ月。きょうだいのほうに世話になってね。一人で帰ってきた。

(中国の家族は、里帰りに対して) それは反対しません。それはもう、わかってたから。あの頃、里帰りっていうのはよくあったから。主人は何も言いません。

日本への永住帰国まで

(永住帰国を決めたのは) それは、帰ってきてから。これでも、ひともめしたんですよ。帰ってくるなんて、そんなに簡単には。どうしてって、うちの主人は設計員でしょ。日本の公務員と同じだから、退職すれば退職金が入るんだしと。でも、長男が主人に、「お母さんが日本人の人、みんな帰るのに、どうしてお母さん(帰国)しないの?」っていう。でも、その頃、長女はもう結婚して、子どもはいるし、長女は一緒に帰って来れないし。で、二女と、長男、次男と主人と。すると、主人の同僚が止めるわけなの。「子どもたちのいうこと聞かないで、あんなとこ、行って、言葉も分からんとこ行ってどうする」って。「自分たちのこと考えろ」って。私もどうしていいか分からなくて。2つの道をどっち歩めばいいかね。子どもたちはやんやんいうの。行きたくてもいけない人がいるんじゃないの。「この条件があるのに、どうしていかないのか」って。子どもたちは責めるでしょう。だから、あの時もひともめしたんですよ。

主人は言葉もわからないし、来たがらないけど、家族に任せてるって態度で。長男と次男が特にね(日本に来たがった)。それに、うちの次男が働いていた工場が紡績工場なの。だから、綿にまみれてね。それが3交替でしょ、若い男の子がする仕事じゃないんですよ。だから、帰らなければ、ここで一生こんな仕事するなら、思い切って帰ったほうがいいって。

長男は、中華料理のお店。コックできるの。お友だちの家によく行って習ってね。別に、お金出して習ったわけじゃないんだけど、結婚式なんかあると、つれてってもらって作ったわ

け。それで、自分で覚えてね。日本に行けば、中華料理屋ができるから。

6. 帰国後の生活

山口への帰国

それから、帰ってきたのが、山口の兄が保証人になってくれて。私と親に連れられて行ったでしょう。開拓団に行く時は。帰ってくる時になると、保証人がいるんですよ。日本人でありながら。保証人も、親もいないし、結局、きょうだいに頼るしかないわね。そうすると、きょうだいでもやっぱり意見が違うわけですよ。

もう、うちの人は、この年になって、退職間際になって、言葉も分からない国に帰ってきてどうするって。あっちでいれば、食べるのには困らないんだから、帰ってこないほうがいいっていうの。兄もいるし、もう1人の弟たちは、でも姉さんが帰ってきたいっていうんだったら、やっぱり帰すのが本当だって。意見が、やっぱりきょうだいでも2つに分かれたわけね。それで、結局、2番目の兄が、今はもう亡くなったんですけど、この兄もソ連に行っていて、ソ連から帰ってきて、山口のほうにいたから、この兄が保証人になってくれたの。この兄は、削岩機とか言うトンネルなんか作るでしょう？あんな仕事したから、塵肺の病気になってたらしいのね。

(兄が)保証人になってくれて、山口のほうに帰ってきたんですけど、東京に帰ってくれば、(政府の)お膝元だから、すぐに旅費は出してくれるのね。県はまた違うの。財政が違うから。出してくれないんですよ。順番待ちですって。1年に3人くらいしか、国費は出せないって、財政に余裕がないから。だから、3年ぐらい待たないとだめだって、兄から手紙が来て。保証人になって、手続きは済ましたけど、旅費はおりないっていうんですよ。すると、みんな帰ってくるつもりになってるでしょう、3年も待ってたらどうします？子どもたちも1年1年、歳とれば、言葉を覚えるのも遅くなるし。仕方ないから、主人の退職金ね。うちの主人、**設計院**に勤めてたから、退職金下りたんですよ。それを旅費にして帰ってきたんですよ。国費で帰ってきた人は、全部(面倒)見てくれるでしょう。帰ってきてから。支度金なんかもみんなもらってるし。自費の人は、何ももらえない。本当は、息子たちは東京に来たかったから、(知人の)三田さんが東京にいたから、まずは東京に着いたわけ。本当は大阪に着くのが、本当なんですよ。山口なら。あっちは、もう帰ってくるって、首長くして待ってるのに、私たちは東京に着いたわけ。それで、東京の三田さんの家で、10日ぐらいお世話になったかな。

それで、山口に連絡してないから、あっちでは、「どうしたんだろう？もう帰ってきてるはずだ」って。それで私が、10日ぐらいして電話して、実はこうこういうわけで、東京にいるんです

って言ったら、怒った怒った、兄が。「なんていうことするんだ」って。「保証人になっとなるのは、こっちでしょう」っていうのね、兄が。それで、保証人になるのに、雇用証明書っていう、帰ってきたら、私の会社でつかいますっていう、はんこが要るのね。それは形式的な問題だけど、田舎でしょう、だからもう、そこで仕事して恩返ししないと、(その書類に印を押してくれた人に)自分の顔が立たない。はんこ1つですよ。その人に、仕事して恩返ししないと、兄がそこで顔が立たないから、どうしても来いっていうので。また、山口にいて。一冬あっちで生活したんですけど。

山口での生活

仕事は、土方の仕事ですよ。2人の息子、「こんなことなら、日本に帰ってくるんじゃないかって私に文句言うでしょう。土方の仕事だから、縄を腰にぶら下げて、山の上に電柱もって登って行くような、そんな仕事だったらいいの。でも、それもいい経験になったのね。その苦労したから、東京に出てきても、どんな苦労も耐えていかれた。あれもよかったんじゃないって、後から言うんです。その頃、息子たちにしてみれば、(中国では)都会に住んでいたのに、こんな田舎で山また山の所で。山口が山でしょう、田舎だから。こんな所に住むんだったら、中国にいたほうがよかったって。

兄は兄で、私たちをそばにおきたかったの。兄がちっちゃい空家を借りて。それもぼろ家だね。もう、蛇は出てくるわ。息子たちはそれも嫌で。あとから兄は後悔した。もう少しいい家探してたら、こっちにいたかもわからないのに、あのぼろ家に住んだから(東京に行ってしまったと)。トイレなんか、竹やぶのそばに、1つぽつんとあるトイレで夜出て行けないの、怖くて。「こんなとこに住むんだったら、ハルピンのほうがよほどよかった」って、子どもたち、私に文句いうし。兄は兄で(山口に残るようにいうし)。私、板ばさみでね。泣くに泣けなかったですよ、その時は、本当。兄は兄で、留めて置きたかったの。おまえは、操り人形だって。息子がこういえば、言うとおりになるのかって、私を責めるでしょう。でも、息子たちの将来考えたら、あの山の奥で、別にいい仕事もないし。

東京へ

それで、東京に出て、長男が、3ヶ月、土方の仕事したんですよ。10月に行って、10月1日から12月の30日まで働いて。土方の仕事、兄弟です。それで、四国のほうに、まだ会ってないでしょう？きょうだいに。帰ってきたけど、まだ会ってないから、お正月の休みに会いに来て、兄たちがいうの。で、家族4人でいったんですよ。行ったら、うちの長男は、あんな山奥に帰る気はない。山口に行く気はないって。今考えたら、可哀相は可哀相。山口に帰ったでしょう、正月の5日頃までいたかなあ？兄弟のうちで、みんなに会って。すると、山口に帰った次の日にもう、トランクもって、東京へ出てくるって行って。それも、言葉も

わからないでしょう。私が、倉敷から東京駅まで、新幹線の切符お願いしますって紙に書いて、それをもって倉敷まで出て。それから出てきたけど、可哀相に、新幹線の中でお茶なんか売ってるでしょう。あれ買いたいなあ、と思うけど、言葉分らないから。あの頃、まだ息子も勇気なかったのね。のど渴いたけど、お茶も買わなかったって。東京まで来て、三田さんの家を頼って行って・・・墨田区にある・・・

(長男が、最初に東京での)足場作ってくれたのね。アパート探して。それで、まだ兄が恩返しがある。せめて1年は働いて、恩返ししなきゃだめだって言うの。下の息子が、そんなにこんな所ではおられないっていうでしょう。私は板ばさみでねえ。本当泣くに泣けなかった。息子たちは、こんなところにいるんだったら、帰ってこなかったって言われるし、兄は兄で、せっかく帰ってきたのに、東京なんか行って、もし何かあったら、保証人になった俺の所にかかってくるからって。だから、「兄さん、私は絶対って言葉は使えないけど、うちの息子たちは本当迷惑はかけないから」って私、言ってね。無理に出てきたんですよ。それが3月。下の息子は、それからまた1、2、3月と、3ヶ月辛抱して、そこで働いた。

うちのひとも、あそこ(山口)嫌だったの。田舎でねえ。(中国ではハルピンという)やっぱ、都会にいたから。田舎はいやだって。それに、山口寒いんですよ。雪が毎日降るし。

(息子は)東京に出てきて、やっぱり中華料理の店探してもらっていったけど、やっぱり言葉分らないからね、長続きしなくて。新橋のほうに、中国の人が開いたお店があったの。そこが雇ってくれて、そこで長く。どのくらいだったかな、1年ぐらい働いたかな、そこのおかみさんによくしてもらって。

(生活費は)山口に行って、生活保護の申請をしたんですよ。言葉分らないし。そしたら私の兄が、「お前、そんな保護なんかもらってたら、そのうちに頭上がらなくなるからね」って言うから、私も辛くってね。もらわないと、息子たちの収入だけでは生活していけないし、それで、あっちで3月まで保護もらって、東京に出てきて。それで、東京のほうは保護をもらうように手続きして。墨田区にいたでしょう、それでもらってたけど。この都営住宅は、特別で支給してもらったんですよ、引揚者の。それで、ここに来る時に、墨田区の福祉の人は、「片岡さん、江東区に行ったら、また手続きしなさい」って言ってくれたの。「どうして生活しますか」っていってもらったけど、「もう2人の息子何とか仕事しますから」って、断って、ここに来てからはもう貰ってない。

次男は東京に来て、なんでもしましたよ。喫茶店のウェイターなんかもして。今は、会社。旅行会社を経営してるの。長男も、一緒に。長男のほうは、貿易。長男は初め中華料理のお店開いて、中野のほうで。でも、うまくいなくて、あの子は性格的に、部屋に閉じこもってる仕事は、性格に合わないの。それで、お店もううまくいかないし、辞めて、^{だいえいかみつうしょう}大永紙通商あそこに10年ぐらい勤めたかな、それから、辞めて紙の貿易の会社を。今は、紙の貿易を。

(結婚は2人とも日本でして、相手は)両方とも中国の人。(中国から)呼んだっていうか、次男のほうは同級生だった人。長男のほうは、紹介する人がいて、北京のほうから帰ってきた人。新橋の中華料理に勤めとる時に、おかみさんがいい人で、1回、中国に帰ってきたらって暇くれて、旅費ぐらい出してくれたらしいの。それで行った時に、その時に世話する人がいて。おかげさまで、子どもたちは、自立はね(早くできた)。

帰国したことに対する思い

(昭和56年当時は)主人もいて、2人の息子もここで一緒に(住んでいた)。今は、長男は、埼玉のほう。埼玉の草加市、次男は墨田区横川っていうところ(に住んでいる)。マンション買って。息子たちは、日本に帰って来たの後悔しないんで。「やっぱりお母さんのおかげで、日本に来てよかった」っていってくれますから。

子どもたち、みんな日本の国籍(をとった)。(孫は)長男は、上が男の子、下が女の子で、もう高校卒業して、今アメリカのほうに留学。言葉、英語覚えるためにね。大学なんか行く気ないから、男の子は。女の子は今高校生。次男のほうは、上が今年中学に入る。2人とも女の子。

娘たちの来日

(帰国のときに中国に残った子ども2人)それは、帰ってくる時に女の子、お母さん1人はつれて帰らなきゃなんないから。男の子だけではね。だから、二女は一緒に帰るつもりで手続き始めたら、もう付き合ってる人がいたの。今の婿さんだけど。だから、日本には帰らないって。それでまた、ひともめしたんですよ。お父さんにしてみれば、女の子1人もつれて帰らないで、日本になんかいくのは嫌だって。こっちの子はこっちでもう付き合ってる、行かないって言うでしょ。手続きは始めたは、その時も大変だったの。

それが、長女のほうが先に来たの。どうしてかっていうと、甘肅^{かんしゅうしょう}省ですか、あっちのほうに行ってたから、家族がみんな。だから、あっちに住んでたし、あそこのほうは田舎っていうか、ハルピンみたいに都会じゃないでしょう、だから、長女のほうを先に来させたの。

(娘は)何年にきたかなあ、私ははっきりもう覚えてないんですよね。もう20年近くになるとかいうから。長女は女の子ばかり3人(つれて、夫も一緒に帰国した)。1回里帰りしてきたんですよ。来てみたらやっぱり、日本のほうがいいからこっちに来たいって言うけど、婿の方がやっぱり心配でね。あっちに家族みんないるでしょう。長女の婿は8人きょうだいな。みんなその甘肅省にいるから。お母さんもいるし、お父さんは亡くなったけど。だから婿のほうは、あんまり来たくないみたいなふうで、心配だったらしいの、日本に来てどう

なるか。でも、あとから同意して、一緒に来たんだって。

(仕事は) 溶接。あっちでも溶接してたから、こっちにきても溶接の仕事。今、仕事なくなって失業中で。あの婿、働き者だから、家でじっとしておられないの。困って、困って、どうしようって、仕事がないから。安定所にいっても、思うような仕事ないしで。

(婿の年齢は) 長女より1つ上だから、55になるかな、54歳だから、長女は。

子どもは、3人、全部結婚して。それぞれ子どもが2人ずついる。長女のうちはね、3人も女の子だから、結婚して。(結婚相手は) 日本人が2人と、一番下のは、中国からの帰国者の。お父さんが日本の残留孤児だとか。

(帰国してからの) 生活は、子どもたちには、言葉の壁があるからね(大変な思いもしたと思う)。それはもう、仕方のないことで。

二女もあとからね(帰国した)。まず姉さん先に帰って。「私はハルピン、都会にいるから、お姉さんのほうに先に手続きして」って行って、長女のほうが先に来て・・・違う。先じゃなかった。二女のほうに先に帰ってきたんだ。あの時に、うちの長女は里帰りに、ここに下の娘だけ連れて帰ってきたの。その時に、二女が帰ってきたでしょう。あっちは都会だから、手続きも早いわけ。子ども連れて、3人で帰ってきて、寮に、^{しんこうそう}新幸荘に入れてくれたでしょう。入れてくれるは、布団や毛布なんか貰って、すぐに家庭らしいのができたから、長女の方も心が動いたわけね。こんなに良くしてもらえるんだったら、帰ってきてても心配ないわっていうので。中国に帰って、婿を説得して、みんなして帰ってきたの。

(二女にも) 1人男の子がいて、こっち来て1人女の子産んで。中国は1人っ子でしょう、だから、こっち来て女の子ができたの。

夫の日本での生活

主人は日本に来てから中華料理店に勤めていたの。やっぱり、言葉も通じないし、いろいろ苦労して、大変だったわね。おとなしい人だったけれど、日本に来てから、お酒を飲んで、ちょっと暴れるようにもなったの。無理ないわね。最後はガンで亡くなった。病院に入れて・・・。子どもたちがよくしてくれたから。ただ、やっぱり、主人にとって、ここ(日本)で亡くなったのは気の毒だったね。中国がよかったんじゃない。子どもたちも、それは言っている。

人生を振り返って

私の苦勞は、他の人の苦勞に比べれば、まだ楽だったわね。姉の苦勞に比べてもね。日本に帰ってきて、子どもたちも、自立して、よくしてくれるし。私は、幸せなんじゃない。



聞き書きを終えて

2003年2月の中旬頃、紹介を受けて、片岡さんに初めて電話をした。そのときには「今、体調が悪いから、時期をあらためてほしい」というような返事だった。それまでの経験上「これは断られているのかなあ」と私は心配したが、1ヶ月ほどして再度電話をしたら、快く受け入れてくれた。

片岡さんを訪ねたのは3月18日だった。片岡さんから指示された通り、有楽町で今から電車に乗る旨を電話して、片岡さんがお住まいになっている都営住宅に向かった。最寄り駅の出口を出ると、目の前には、都営住宅の団地群。棟の数字が建物に書いてあったので、簡単にさがせるだろうと歩き始めたが、思いの外、遠く、そして少々迷った。ようやく、片岡さんの住んでいる棟の前について、上を見上げたら、片岡さんが玄関を出たところで、下を見ていた。私の到着を待ってくださっていたのだ。下から軽く会釈をしたら、手を振ってくださり、早くあがって来るよというような仕草をみせてくれたのが今でも記憶に残っている。

家の中に入れていただき、挨拶を交わした後、片岡さんは「先月はごめんなさいね。喘息になってしまって入院して退院したところだったの。だから、まだ身体が大変だったから。私は、お話をするのを楽しみにしていたの」と言い、お話をはじめてくださった。

いわゆる「中国残留婦人」と呼ばれる方のお話をうかがうのは、全く初めての経験ではなかった。ちょうどその直前まで、長野県で何人かのお話をうかがう機会があった。しかし、1人で聞くのは初めてで、要領の得ない聞き手になってしまった。そして、片岡さんが語ってくれたお話をきちんと理解して、次に話しを進めてもらうことができたかは、どうも心許ない。

片岡さんは、何度か「私には親がいたから、苦勞は少ないのよ」と言いながら、ご自身の生活を語ってくださった。しかし、慣れない満州での生活、敗戦、逃避行、中国での結婚、「残留体験」など、やはり大変なご苦勞であり、片岡さんの人生の中心部分を占めていることがわかる。さらに、まだ子どもだった片岡さんが親に連れられ満州に渡り、あまりの寒さに驚いたこと、また、近くに住んでいた中国人に「中国語」らしき言葉で語りかけてみた経験など、そこで「生活」をしていたからこそ語る事ができる小さなエピソードの一つ一つが私にとっては印象的であった。

片岡さんの話りのクライマックスと言える部分は、敗戦後、「日本はもう存在しない」という噂がながれ、「それならば中国人にお世話になるしかない」と中国人と結婚、その1ヶ月後、引揚げのニュースが入り、結婚したことを後悔したと語る部分である。結婚生活は、それなりに安定し、夫も優しい人であったと語っているが、この出来事が、片岡さんの人生の転機だったことは間違いない。

現在は、子どもたちも日本で無事に自立。同じ都営住宅内に住む娘さんが、頻繁に片岡さんを訪ね、身の回りの世話をしてくれ(私が訪問している間にも買い物を買った娘さんが来られた。

片岡さんは「あの子、日本語はまだまだですけどねえ」と苦笑気味ながらも、「近くにいるからよく世話をしてくれる」とうれしそうにお話された)~~生活保護を受給しながらも~~、日本での生活がそれなりに安定していることなどを語りながら、「今は幸せですよ」と何度もおしゃっていた。

こうして、片岡さんの語りをまとめてみると、語られている現場で感じていた片岡さんが必死に生き抜いてきた生き様が、十分には現れていない。それは、ひとえに、聞き手であり編集を行った私の責任である。

喘息が完全にはよくなっていなかったようで、時折、「ヒューヒュー」という喘息の人特有の息が聞こえていたため、「早く話しをすすめなくては・・・」という変な焦りが生まれていたことも、一因ではある。体調の悪さをおして、2時間以上にわたって、私に人生をお話してくださったことに心から感謝したい。(やまもと かほり)

基本データ

聞き取り日：2003年3月18日（火）

聞き取り場所：片岡清子さんのご自宅

